

## 7 ポーフィリアの恋人

夜更け前 とうとう雨が降りだした  
間もなく陰鬱な風が立ち  
<sup>にれ</sup>楡の木々をなぎ倒して吹き抜けて  
湖面をひどく苛立たせた  
僕は今にも砕けそうな心臓で耳をそばだてていた 5  
ポーフィリアは音もなく入ってくると  
冷たさと雨を締め出した  
<sup>ひざまず</sup> 跪き 消えかかった暖炉の火をおこし  
僕の小さな家を温めた  
そして立ち上がると 10  
雨水の滴るマントとショールを脱ぎ  
汚れた手袋をはずして  
帽子をとり 濡れた髪を下ろした  
ようやく僕の隣に座り 僕の名を呼んだ  
僕が返事をしないでいると 15  
ポーフィリアは僕の腕を自分の腰にまわし  
白くなめらかな肩を露わにして  
金色の髪を片側に寄せた  
身を屈め 僕の頬をその肩に載せ  
金色の髪で覆い 20  
恋焦がれど と呟いた  
ポーフィリアは意気地なし  
プライドで自分の激情を閉じ込めて  
プライドの束縛から逃れることもできず  
ずっとその身を僕に投げ出すことができずにいた 25  
けれども情熱が勝ることだってある  
今宵の華やかな宴の最中<sup>さなか</sup>に  
突然こんな僕のことを思い出したのだ  
ポーフィリアを想って恋患いの僕のことを  
だから嵐の中ポーフィリアはやってきた 30  
僕はポーフィリアの瞳を見上げた  
その瞳には幸せとプライドとが映っていた  
ポーフィリアは本当は僕を慕っているのだ  
何をすべきか考えている間もずっと

驚きが僕の心に広がった 35  
この瞬間ポーフィリアは僕だけのもの  
綺麗で無垢で善良なポーフィリア  
僕はすべきことを思いついた  
その金色の長い髪を一つに束ね  
ポーフィリアの細い首に三度巻きつけて 40  
そして絞めた ポーフィリアは苦しまなかった  
きっと苦しまなかったはずだ  
中に蜂を宿した 蕾<sup>つぼみ</sup>を開くように  
僕はポーフィリアの瞼をそっと開いた  
汚れ<sup>けが</sup>の無い青い瞳が笑っていた 45  
それから首に巻きつけた髪<sup>ほど</sup>を解いた  
僕の熱い口づけでポーフィリアは  
もう一度頬を赤らめた  
僕はポーフィリアの頭を起こした  
今度はその頭を僕の肩に載せた 50  
ポーフィリアは項<sup>うなだ</sup>垂れたまま動かなかった  
愛しい薔薇色の笑顔が  
一番に望むものを手に入れてとても嬉しそう  
軽蔑していたものすべてが消え去り  
代わりに愛する僕を手に入れたのだ 55  
ポーフィリアの恋人 ポーフィリアの唯一の望みが  
どんなふうに叶うか思いもよらなかったはず  
こうして今僕たちは一緒にいる  
一晩中じっと待っている  
神の祝福の声は まだ聞こえてこない

(福山真季・原由子寄稿)